化学科だより

化学科長・理学研究科化学専攻長 持田智行

化学専攻および化学科の近況をお伝えします。

2010年3月をもちまして、姫野貞之教授(無機化学/溶液化学分野)、富宅喜代一教授(物理化学/反応物理化学分野)が定年を迎えられました。本学における長年の教育・研究活動に対して敬意を表します。なお富宅名誉教授は、JST 先端機器開発プロジェクトの研究代表者として、気体の核磁気共鳴装置の開発を今年度まで継続されています。また、網井秀樹准教授(有機化学/有機反応化学分野)が、群馬大学工学系研究科に教授として転出されました。新天地でのご活躍をお祈りします。

これらの先生方の定年、転出に伴い、来春の着任を目指して3件の採用人事(有機化学、無機化学、化学全分野)が進行中です。専攻内では内野隆司准教授(無機化学/固体化学分野)が教授に昇任されました。また大学院連携講座に坂田修身准教授(財団法人高輝度光科学研究センター)が新たに加わられました。益々の連携を期待しております。

次に受賞のお知らせです。瀬恒潤一郎教授(有機化学/分子機能化学分野)が第7回有機合成化学協会関西支部賞、内野隆司教授(無機化学/固体化学分野)が第64回日本セラミックス協会賞学術賞、富宅喜代一名誉教授が第二回分子科学会賞を受賞されました。加えて、大西洋教授(物理化学/物性物理化学分野)が日本表面科学会のフェローに選出されました。学会等における学生の受賞も複数件ありました。このように、教員、学生ともに学内外で顕著な業績を挙げています。

一方学内でも、学内外から講師をお招きしての学術講演会、セミナーが随時開催されています。これらの状況については、化学専攻のHP (<http://www.chem.sci.kobe-u.ac.jp/>) をご覧ください。筆者自身も「若手研究者のための英語論文作成講座」ほかを企画し、多数の熱心な学生の参加をみました。

6月には、8大学化学科長・化学専攻長会議が本学で行われ、各大学(神戸大、千葉大、金沢大、岡山大、新潟大、熊本大、奈良女子大、お茶の水

女子大)の現況について意見交換を行いました。入試・学生指導・進学・就職状況のいずれにおいても、本学は極めて良好です。

本専攻の大学院入学定員は、博士前期課程(修士)が28名、博士後期課程(博士)が6名です。学部生の9割は修士に進学し、卒業後も専門性を生かした職に就いています。修士修了者の2割弱はさらに博士課程に進学し、先導的な研究を担い、国内外の学会でも幅広く活躍しています。昨今の不況下にあっても大学院生の就職状況は良好です。同窓会の皆様方のお力添えに感謝いたします。

5月と6月には、他大学からの院進学希望者を主な対象としたオープンラボ(見学会)を開催しました。研究室見学も随時受け付けています。今年度の大学院入試は学内外から多数の受験者がありました。学部3年次編入試験の受験者も益々増加傾向にあります。いずれも本専攻の認知度の高さと、化学への関心の高まりを反映したものです。

例年7月に行われる本学の理学部サイエンスセミナーでも、理学的研究・学術研究のあり方を一般向けに紹介しています。化学は、学際領域を取り込みつつ進化・深化を重ねてきた学問であり、物質の性質・変化の解明と、新物質の創出を標榜しています。このような背景を踏まえつつ、本専攻では筆者が「有機金属イオン液体—世界を変える驚異の液体—」と題した講演を行いました。同窓生の皆様も、機会ありましたらぜひこうした行事にも足をお運びください。

ところで筆者は無機化学講座(固体化学分野)に所属し、この4月より化学専攻長・学科長を務めております。以前の誌にもご指摘がありましたように、学生定員が少なく、スケールが小さい感がありますが、ここでは少人数教育を生かした高度な専門教育に取り組みます。また本学は関西圏での知名度とは裏腹に、関東(全国区)での認知度は低いようです。このような課題も認識しつつ、今後の教育研究を展開します。化学科・化学専攻の更なる発展のために、同窓生の皆様の変わらぬご支援とご指導を、どうぞ宜しく願い致します。